

# ケネディ政権とベルリン危機(2)

服部一成

## 目次

- はじめに
- 1. 封鎖対策
- 2. 交渉計画
- 3. 対ソ交渉
- 4. NSAM 109
- おわりに

## はじめに

1961年10月17日、第22回ソ連共産党大会（-10月31日）で、フルシチョフ（Nikita S. Khrushchev）ソ連首相は、対独平和条約の年内締結に固執しないと演説した<sup>1)</sup>。同年6月4日、ウィーンの米ソ首脳会談で、彼がケネディに行った最後通告を撤回したのである。

本稿の目的は、同年8月13日のベルリン第2次封鎖から第22回党大会までに、ケネディ政権がベルリン問題についてどのような政策を決定したのかを明らかにすることである。

議論の順序は、まず封鎖対策を分析し、つぎに外交・軍事政策を検討する。

## 1. 封鎖対策

8月13日、ハイアニスポートで封鎖の連絡を受けたケネディは、ラスクに電話で、ソ連軍が封鎖ラインの近くにいるかとたずねた<sup>2)</sup>。また国境警備兵が、東ベルリンへのアクセスを阻止しようとしているかを知ろうとした。ラスクは、ソ連兵の姿はなく、作戦は明らかに東ベルリンから西ベルリンへのアクセスの阻止をもくろんでいると答えた。ケネディは、ラスクの用意したベルリン交通制限に関する国務長官の声明を承認し、事態の悪化を

防ぐよう命じた。同日発表のそれは、その制限が現行協定の違反であり、嚴重な抗議に値する問題であると強調していた<sup>3)</sup>。

8月14日、ケネディは、ラスク宛のメモで、ソ連と東ドイツによる封鎖を政治宣伝に利用するために、今週どのような手段をとるかと問いかけた<sup>4)</sup>。しかし16日、ブランド(Willy Brandt)西ベルリン市長が、ケネディ宛の私信で、じっと守るだけの姿勢では、西側諸国に対する信頼の危機を引き起すと批判し、アメリカ駐屯軍の劇的な増強を提案した<sup>5)</sup>。また17日、ダウリング(Walter C. Dowling)駐独大使は、ベルリンの信頼の危機を深刻に危惧すると述べ、大統領がベルリン市民に個人的なメッセージを送るよう勧告した<sup>6)</sup>。

8月17日のミーティングで、ケネディは、ベルリン情勢に精通するCIAの職員に、西ベルリンの士気について質問した。彼の説明によると、西ベルリン市民にとってベルリンは一体のもので、東西市民間の交流も日常生活の一部であっただけに、今回の境界閉鎖に大きなショックを受けている。その上西側は何もしないとわかって、多くの人々が同盟国は次第に西ベルリンの保護から手を引くつもりではないかと恐れ始めた。西ベルリン市民の信頼回復と、精神の再活性化のための手段をとることが肝心である。ケネディは、つぎの決定を下した<sup>7)</sup>。

1. アメリカ駐屯軍の増強(1個戦闘部隊 1,500-1,800人)。
2. 副大統領とクレイ将軍(Lucius D. Clay)のベルリン派遣(ブランド市長の私信に対する大統領の返書を持参)<sup>8)</sup>。
3. 西側3国政府首脳による抗議声明。

## 2. 交渉計画

8月21日、ケネディは、ラスク宛のメモで、「ベルリン交渉でもっと強い主導権を発揮したい」という決意を表明した<sup>9)</sup>。メモの骨子は、以下の通り。

1. 対ソ交渉の日程と西側の立場は未決定で、もはや4カ国協議だけで満足な進展がはかれるとは思わない。
2. アメリカの政策を早急に立案し、他国の拒否権を受諾できないことを明らかにする。
3. 今週3同盟国に、9月1日より前にソ連へ交渉の招請状を出す計画であることを知らせ、同意するか後に残るかをはっきりさせる。
4. 国連に来る4カ国外相が対ソ交渉の時と場所を案出する。
5. 交渉日程としては、9月1日より前に交渉開始の公表、10月1日より前に交渉の範

困と手段の討議, 11月1日頃の正式交渉。

6. アメリカの政策立案上, アチソン・ペーパーは, 良い出発点ではあるが到達点ではない<sup>10)</sup>。
7. 少数の政策立案グループを選任する。彼らにつぎのガイドラインを与える。
  - a. できるだけ新味のある枠組を作る。
  - b. 自決権の観念, 全ドイツの観念, そして西ベルリンで, 自由を保護の下に育成しうる事実に対するアメリカの支持を擁護する。
  - c. 占領権の維持を強く要求しない (他の強力な保証を構想しうるなら)。
  - d. 2つの平和条約の選択肢を熟考する (フルシチョフがまさにこれを提案してきている)<sup>11)</sup>。
  - e. 利用するためにフルシチョフの声明を全て調べあげる。
  - f. 最初の提案をできるだけ説得力のある合理的なものにする。

9月12日, ケネディは, ベルリン交渉に関して, ラスクと以下の合意に達した<sup>12)</sup>。

1. 平和会議の招集と2つの平和条約に向けての作業というアプローチ (ラスクが細部まで仕上げる)。
2. これに基づくトンプソン (Llewellyn E. Thompson) ソ連駐在大使による対ソ交渉の開始。

一方でケネディは, 自由選挙によるドイツまたはベルリンの早期の再統一方式を, 政策の枠組として用いることを, 交渉の余地がないとして拒否した<sup>13)</sup>。

### 3. 対ソ交渉

9月21日, ラスクは, グロムイコとの第1回会談で, ケネディの指示通りに, ベルリン交渉の基本原則を明らかにした<sup>14)</sup>。

1. 交渉は威嚇に満ちた雰囲気の中では, 不可能ではないとしてもむずかしい。しかしそれが改善すれば, いつでも実質的で建設的な話し合いをする。
2. 基本的に反対しているのは, ソ連が威嚇によって西ベルリンにおけるアメリカの権利を剥奪しようとしていることである。大統領が7月の演説で述べた3つの基本的な権利を守るためには, 断固として戦う<sup>16)</sup>。
3. 西ベルリンにおけるアメリカのプレゼンスは, 根本的に占領権だけでなくまたその市民の意思による。彼らの安全を守るために駐留しているのである。

10月2日, バンディは, ケネディにつぎのような意見を上申した<sup>17)</sup>。

1. 第3回ラスク = グロムイコ会談で, ソ連は, 以下の4点に基づいて, 適当な追加協

定を結びうるなら、新しい保証によって、アクセス問題を解決する用意があることを明らかにした<sup>18)</sup>。

- a. ドイツ（国家・地区の）境界の承認。
  - b. 東ドイツの主権尊重。
  - c. ヨーロッパにおける核兵器の拡散防止。
  - d. 西ベルリンの自由市化の合意。
2. ラスクは、これらに関するアメリカの政策方針の勧告を準備するようスタッフに指図した。今こそアメリカの交渉上の立場を決めるために、真剣かつ緊急な努力を払うべきである。
3. 唯一の難点は、ラスク＝グロムイコ会談中では、アメリカの譲歩に対する見返りが、権利の再保証以外何もないことである。危険な宥和政策との批判を、ドイツ人、フランス人、および共和黨員から受けるに違いない。グロムイコが帰国する前に、彼につきの提案をすることを、ラスクに打診すべきである。
- a. 全関係国が同意と保証を与える文書中に、アクセス権の全てを綿密に細部まで記述することによって、アクセス権を改善すること。
  - b. こうした合意が、東ドイツの主権に基づく承諾を当てにしないことを明らかにするために、なんらかの国際管理を取り決めること。
  - c. ある一つのアクセス・ルート（できればアウトバーン）を、十分に国際化して、東ドイツ以外のなんらかの団体の直接管理下に置くこと。

10月3日、ポーレン（Charles E. Bohlen）国務長官特別補佐官は、ラスク宛のメモで、グロムイコの示したソ連の立場を、以下のように分析した<sup>19)</sup>。

1. フルシチョフのベルリン危機醸成の目的は、西側諸国に対するショック療法であった。とはいえ彼の意図としては、そのために緊張が激化し、戦争の危険を冒すことまでは想定していなかった。彼の大きな誤算は、特にアメリカの反応（7月25日の大統領演説）であった。
2. そこで8月末以来、交渉による解決を求めるソフト路線に転換してきている（ベルリン封鎖は、亡命者の殺到に対処する措置であり、核実験の再開は、根本的には軍事的理由からである）。
3. この変化は、単なる戦術で、共産党大会でハード路線を復活させるかも知れない。しかしアメリカの軍事的準備に関して、外交上の圧力をかけてこないことから、交渉志向は本物と見なしうる。
4. 古典的なボルシェビキの交渉戦術は、最初の要求を減らす用意があるとのほめかすことである（決して譲歩ではない）。これによってソ連は、最初の立場に関して最大

の満足を獲得しようとする（戦争を避けるためにのみ修正を行う）。

5. ソ連は、西側の譲歩（4点）の見返りとして、西ベルリンへのアクセスに関する保証の協定を提示している。この協定については、つぎの疑義がある。

- a. それは東ドイツの直接参加なしに、ソ連と直接交渉するのか。
- b. その場合、実際の協定内容はどうなるのか。それは現行協定（特に民間航空協定）の明記になるのか、または東ドイツの主権を配慮する全く新しい協定になるのか。それは西ベルリンの生活に関する一定の禁制を含むのか、または現状のままにするのか。
- c. それはソ連と東ドイツ間の義務として、ソ連と東ドイツの平和条約に含めるのか、または東ドイツが受諾し支持する別の4カ国協定になるのか。西側の譲歩については、以下の点を精緻化すべきである。

(1) ドイツ境界の承認は、どのような形をとるのか。境界に関する武力不行使宣言で十分なのか。ドイツの現在の国境線と両ドイツの境界線を区別できるのか。

(2) 東ドイツの主権の尊重とは、何を意味するのか。アクセス協定履行に際して、東ドイツ政府の職員に対する直接的な処置を要求するものなのか、そして彼らはどのような資格で行為するのか。グロムイコは、これはなんの承認も伴わないとほめかしている。

(3) 核兵器に関する西ドイツに対する現在の制限を繰り返すことで十分なのか、またはソ連はこの点についての新しい4カ国協定を期待しているのか。

(4) 西ベルリンの自由市化は、同市における現在の活動の自由に対してなんらかの損失または制限を加えるのか。

10月6日、ケネディは、グロムイコとの会談で、ソ連提案を受諾する場合、アメリカにとって不利な点を列挙した。

1. アメリカの権利に関する期限。
2. 西ベルリンにおけるソ連軍の駐屯。
3. ドイツ国境の承認。
4. 東西ドイツ分割の承認。
5. 西ドイツによる統一ドイツの断念。

ケネディは、ソ連が「りんご1個と果樹園を交換」しようとしていると批判した<sup>21)</sup>。彼は会談を、全然進展がなかったと評した<sup>22)</sup>。対ソ交渉の第1ラウンドは、終了した<sup>23)</sup>。

#### 4. NSAM 109

9月18日、ケネディは、軍事的増強策として、1個歩兵・1個機甲師団（支援部隊を伴う）の召集を決定した<sup>24)</sup>。そして10月20日、彼は、「ベルリン紛争における軍事行動に関するアメリカの政策」と題する文書を承認した。それが国家安全保障行動メモ（National Security Action Memorandum 以下 NSAM と略記）文書109となった<sup>25)</sup>。同文書は、つぎのような内容であった。

I. ソ連／東ドイツが、ベルリンへの地上または空からのアクセスを妨害する（決定的な封鎖にはいたらない）場合、3国は合意の上ベルリン緊急計画に基づき、空から戦闘機の護衛を受けて、地上で1個小隊またはそれより小さな兵力を用いて、ソ連の意図に探りを入れる。

（コメント：この段階では、ソ連が戦争開始を望まないかぎり、3国のどのような行動も、大戦争の危険を物質的に引き起すことはないので、実行の決定は、北大西洋条約機構（North Atlantic Treaty Organization 以下 NATO と略記）よりはむしろ3国の責任である。）

II. ソ連／東ドイツが、上記の3国の行動にもかかわらず、封鎖維持の決意を示す場合、NATO 同盟国は、通商禁止や国連活動のような非戦闘行動を始める。それと同時に、急速な動員と増強を行って、下記の行動に要する能力を改善する。とはいえ事態の切迫により NATO 軍を相当増強した場合、非戦闘手段後、直ちに下記の軍事行動のコース（一つまたは複数）に着手する。

（コメント：同盟が主要な軍事作戦の前に他の手段を利用することを提案する以上、非戦闘努力が下記の軍事努力に先行する。そしてヨーロッパにおける増強の遅れと即時の行動の間で、どのような選択を行うかという問題がある。同盟国による増強がないと、早期の軍事行動の選択肢に制約を生ずる。遅れ過ぎては、核の信頼性を弱め、西ベルリン存続の可能性をおびやかす、同盟の決意を腐食させる。しかし現在用いる兵力のみで早期に非核の行動をとるならば、こうした不利より核のエスカレーションの危険の方が重要である。ヨーロッパにおける同盟兵力が現在のレベルを上回るほど、軍事行動の遅れを減らせるか、軍事行動を既存の兵力レベルに適合させる。）

III. 同盟の行動にもかかわらず、ベルリンへのアクセスが回復しない場合、同盟国は、アクセス再開の達成という意図を明らかにしながら、ソ連／東ドイツの封鎖維持の意図をはっきりさせるのに適切な一層の行動をとる。その際、以下の軍事行動のコース（一つまたは複数）に乗り出す。

## A. ヨーロッパ戦域

1. 地域的な航空優勢を得るために、地上防御兵力の背景に対して、非核の空軍による行動を展開する。必要な規模と範囲に散開させる。

(コメント：おそらく敵兵力は、おおよそ同等であろう。軍事的成功は、地域的には可能である。政治的效果として、ソ連に核戦争の大きな危険を著しく示す。航空作戦のペースと不安定により、急速なエスカレーションの危険が高まる。)

2. 強力な航空支援を受けて、師団およびより大きな兵力で、東ドイツ領域へ非核の地上作戦を展開する。

(コメント：これはソ連に、とても取り消せないエスカレーションの危険が近づくのを表示する、政治的目標を持った軍事作戦である。ソ連の抵抗の決意を軍事的に圧倒することは、達成不可能である。ソ連に対する軍事的圧力が増すにつれて、危険も増す。)

## B. 全世界的に

海上支配、海軍による封鎖、または他の全世界的な手段。報復とソ連に対する一般的な圧力の追加とを目的とする。

(コメント：この行動自体は、実効が上がりそうになく、いずれにせよヨーロッパの中央戦線におけるソ連の行動開始につながる可能性がある。それはベルリンとは直接関係がなく、政治的責任を課すであろう。同盟の海軍の明らかな優勢を利用する。核の危険に関しては、遅延効果をもたらすであろう。統合参謀本部と主要な統合司令官の見解によると、海軍による封鎖は、中央ヨーロッパにおける他の軍事行動を伴うべきである。)

- IV. 同盟の相当な非核の兵力の行使にもかかわらず、ソ連がアメリカの死活的な利益を侵害し続ける場合、同盟国は、核兵器を使用する。以下の行動のコースから一つを選んで開始し、必要に応じて下記のCへと継続する。

- A. 核兵器の使用の意思を示威するという主要な目標にかなう選択的な核攻撃。
- B. その上に同盟軍を完全な状態で保護するといった重要な戦術的利益を達成するためや、目標に向けて圧力を散開させるための核兵器の限定した戦術的使用。
- C. 全面核戦争<sup>26)</sup>。

(コメント：同盟国は、核兵器の使用のタイミングと規模の決定に一部関与する。小規模の交戦開始後、常にソ連がその使用に着手する可能性がある。同盟が限定核攻撃を始めると、核の応酬になったり、無制限な攻撃をうながすかも知れない。)

## おわりに

壁の構築は、ケネディにとって、予想通りの展開であり、また問題の解決であった<sup>27)</sup>。したがってこれを西側の政治宣伝にどのように利用するのが主要な関心であった。ところが西ベルリン市民の士気喪失に、特別な措置が必要になり、副大統領とヒーローの派遣、駐屯軍の増強で急場をしのいだ。

ケネディは、危機の転換点 came と判断し、交渉推進を決意した<sup>28)</sup>。3同盟国との協議は、仏独の抵抗で機能せず、これを放棄し、対ソ交渉一本で進むことになった。交渉方針として、①平和会議の招集と二つの平和条約に向けての作業、②トンプソンへの交渉の委任を決定した。

グルムイコとの予備交渉では、両国の基本原則の確認に終わった。アメリカ側は、西ベルリンにおける権利を、ソ連側は、ドイツ境界の承認、東ドイツの主権尊重、ヨーロッパにおける核拡散防止、西ベルリンの自由市化を提示した。ケネディは、融和政策に陥ることを、最も警戒していた。

軍事政策では、増強策を着実に進め、ベルリン紛争の作戦を決定した。作戦は4段階で、①探り（小兵力使用）、②非戦闘行動（経済的・外交的手段を含む）と増強策、③通常戦力の行使、④核戦力の行使からなっていた。①でソ連の意図を察知して、②で開戦を回避しつつ、封鎖を解除させるべくあらゆる努力を尽す。③～④では、柔軟反応戦略を適用する。アメリカは、核戦力の圧倒的な優位を切り札に、戦力行使のエスカレーションの中で、より下位のレベルでソ連の屈服を強要する戦略であった。

自国の死活的な利益を守るためには核戦争も辞さずの決意と、核の優位とを言明する一方、核の信頼性の確保に柔軟反応戦略を採用して通常戦力を増強することで、軍事対決の不利を知らせ、交渉に誘導することが、軍事政策の政治的目標であった。

交渉上の立場は、未決定であったが、ケネディは、自由選挙によるドイツまたはベルリンの早期の再統一方式は除去した。とはいえ彼は、東ドイツを承認して、二つのドイツを永続させるつもりもなかった<sup>29)</sup>。外交政策の手詰まりは、米ソ関係と米独関係のリンケージによるものであった。アメリカが西ドイツの支持する自由選挙によるドイツ再統一方式を提案すれば、ソ連が拒絶する。逆にアメリカがソ連提案の東ドイツの承認を受諾すれば、西ドイツが反対する。このジレンマからどのように脱するのか。ケネディ政権の模索は続いた。

### 注

1) A・M・シュレジンガー、中屋健一訳『ケネディー栄光と苦悩の一千日（上）』（河出書房



新社, 1966年) 419頁。9月30日(推定), グロムイコ (Andrei A. Gromyko) ソ連外相は, ラスク (Dean Rusk) アメリカ国務長官に同じ見解を表明していた。ケネディ (John F. Kennedy) アメリカ大統領は, ラスクに「どうやら雪解けのようだ」と語った。マイケル・ベシュロス, 筑紫哲也訳『危機の年—ケネディとフルシチョフの戦い, 1960-1963 (上)』(飛鳥新社, 1992年) 474頁。

- 2) 封鎖の連絡については, つぎを参照。 *Foreign Relations of the United States* (以下 *FR* と略記), 1961-1963, Vo 1, XIV (Washington: Govt. Print. off. 1993), p. 325. ベシュロス, 前掲書, 400-401頁。ケネディとラスクの会話については, つぎを参照。同書, 401-402頁。Richard Reeves, *PRESIDENT KENNEDY: PROFILE OF POWER* (New York: TOUCHSTONE, 1994), p. 210.
- 3) 声明については, つぎを参照。 *FR*, 1961-1963, XIV, P. 325. ベシュロス, 前掲書, 402頁。Reeves, *op. cit.*, p. 211. おだやかな声明の意図は, アメリカが一因でもあった1956年のハンガリーの悲劇を東ドイツで繰り返させないことと, ソ連にアメリカが過剰な動きには出ないと確信させることであった。ベシュロス, 前掲書, 402頁。ケネディは, ワシントンに急いで戻るつもりはなかった。彼はラスクに, 予定通り野球の試合を見に行くことを勧め, 自分はセイリングに行くと話した。Reeves, *op. cit.*, pp. 210-211.
- 4) *FR*, 1961-1963, XIV, p. 332. 同日, バンディ (McGeorge Bundy) 大統領特別補佐官は, CIAの職員から助言を受けた。ベルリンへの誓約をはっきり行動で示すこと。西側からの通行の自由を確認するために, 当日の午後, アウトバーンを使って機動部隊を送り込む。バンディは, この案をケネディに推奨したが, テイラー将軍 (Maxwell D. Taylor) 大統領軍事代表は反対した。戦闘が始まれば6時間でベルリンのアメリカ軍は全滅するというのがその理由であった。ケネディは, テイラーに賛成した。ベシュロス, 前掲書, 404頁。
- 5) *FR*, 1961-1963, XIV, pp. 345-346. 同日, 30万人の西ベルリン市民が, 市役所前の広場に押し寄せた。彼らは, スローガンを叫び, プラカードを掲げた。「西側に裏切られた。…国防軍はどこだ。西側はまた屈辱的な譲歩をするのか」。ブランドは, 市役所の壇上から演説した。「あなたがたの基本的な人権は西側勢力によって守られている。さもなければ, 戦車が踏み込んできていただろう。それに, ベルリンに必要なのは言葉ではない, それ以上のものだ」と語りかけ, ケネディに私信を送ったことを付け加えた。ベシュロス, 前掲書, 405-406頁。
- 6) *FR*, 1961-1963, XIV, p. 341.
- 7) *Ibid.*, pp. 347-349.
- 8) クレイ将軍は, ベルリン第1次封鎖時代のヒーローであった。ベシュロス, 前掲書, 407-408頁。大統領の返書は, *FR*, 1961-1963, XIV, p. 352-353. その中で, ケネディは, ソ連の境界閉鎖の決定を取り消すことができるのは戦争だけであり, 誰もそれを考えたことはない」と述べた。*Ibid.*, p. 352. ケネディは, 補佐官に私的に語った。フルシチョフが「あの都市を占領しようと思ったら, 壁は必要ないはずだ。これは彼の苦肉の策だろう。優れた解決法だとは思わないが, 戦争よりは壁の方がよっぽどましだからな」。ケネディは, 私的には壁の構築を問題というより解決と見ていたのである。ベシュロス, 前掲書, 409頁。8月19日, ジョンソン (Lyndon B. Johnson) アメリカ副大統領は, 35万人のベルリン市民の喝采を前に演説し, 人々を心服させた。翌日, 第8歩兵師団第1戦闘部隊 (1,500人) が, アウトバーンを通して東ドイツ国境を越え, 西ベルリンに到着した。兵士は市民の熱烈な歓迎を受け

- た。ベルリンの信頼は再び立ち直り始めた。同書、415-418頁。シュレジンガー、前掲書、415頁。
- 9) *FR*, 1961-1963, XIV, pp. 359-360. 8月14日、バンディは、ケネディにつぎの意見を具申した。直属スタッフ間で、翌週または10日以内に、はっきりした交渉のイニシアティブをとるべきとの見解の一致をみた。*Ibid.*, pp. 330-331.
- 10) アチソン報告「ベルリン 政治計画」は、*Ibid.*, pp. 245-259.
- 11) 対独平和条約に関するソ連政府の対米覚書（1961年6月4日）中で、「もしアメリカが両ドイツと単一の平和条約を結ぶ用意ができないのであれば、2つの条約にもとづく平和処理を実現させることも可能である」と提案。同覚書は、『ドイツ・ベルリン問題の研究』（日本国際問題研究所、1963年）257-260頁。
- 12) *FR*, 1961-1963, XIV, p. 402.
- 13) *Ibid.*, p. 403. 9月14日-16日、西側外相会議を開催（9月15日午後1時からの会議にはケネディも参加）。対ソ交渉積極派の米英対消極派の仏独が対立。交渉日程の決定にいたらなかった。同会議については、*Ibid.*, pp. 405-408, 411-424 参照。同会議の結果、ケネディは、4カ国交渉を放棄する意向を固めた模様。*Ibid.*, pp. 429-431 参照。
- 14) 会談の前日、ケネディとラスクは、その打ち合せを行った。バンディは、ケネディがラスクに指示を与えるための準備として、彼が当時語ったことを要約していた。バンディのケネディ宛のメモは、*Ibid.*。会談については、ベシュロス、前掲書、457-458頁参照。
- 15) 8月28日、ケネディは、ソ連がまもなく核実験を行うとの情報を得た。ウィーン的首脳会談で、フルシチョフは、1958年から両国が続けている自主的な実験停止を、ソ連の方から破ることは絶対ないと保証していた。9月1日、3日、5日と、ソ連は3回実験した。ケネディは、アメリカの実験再開を命令した。彼はラスクに、「交渉を始める前に世界をとことん恐怖に陥れようとしているのだが、まだ十分ではないと見ているんだ」と述べた。9月1日-11月4日の間に、ソ連は、少なくとも30回の実験を行った。核実験再開については、つぎを参照。同書、428-435, 448-451頁。シュレジンガー、前掲書、464-477頁。
- 16) 3つの基本的な権利とは、アメリカの西ベルリンにおけるプレゼンスとそれへのアクセス、および西ベルリンの自由と存続である。ベシュロス、前掲書、360, 381, 389頁。グロムイコは、ベルリンをめぐる戦争は馬鹿げており、思いもよらぬことで、不必要なものだと答えた。同書、458頁。
- 17) *FR.*, 1961-1963, XIV, pp. 460-461.
- 18) 9月27日、30日の第2・3回ラスク=グロムイコ会談については、それぞれ *Ibid.*, pp. 439-441, 456-460 参照。
- 19) *Ibid.*, pp. 464-467.
- 20) 会談については、*Ibid.*, pp. 468-480 参照。
- 21) *Ibid.*, p. 477.
- 22) ベシュロス、前掲書、481頁。
- 23) 10月1日、ケネディは、フルシチョフからの私信（9月29日付）を受け取った。フルシチョフは、秘密の文通による意見交換を呼びかけてきた。ケネディは、16日付の私信で同意した。フルシチョフとケネディの私信は、それぞれ、*FR*, 1961-1963, XIV, pp. 444-455, 502-508. 4日、ケネディは、ベルリン問題について、ジャーナリストにつぎのように述べた。ウィーンでは、フルシチョフは、この問題にアメリカの威信がかかっていることを認めなかつ

たが、今では認めて態度もそれほど強硬ではない。またアメリカ国民が、戦争の瀬戸際まで行く用意があることを信じている。戦争なしに解決できる可能性はまだ低いが、フルシチョフに核兵器の使用を辞さないと思込ませることができたと思う。ベシュロス、前掲書、473-474頁。

24) *FR*, 1961-1963, XIV, pp. 429.

25) *Ibid.*, p. 517, 521. NSAM No. 109 は, *Ibid.*, pp. 521-523.

26) 9月13日、レムニッツァー将軍 (Lyman L. Lemnitzer) 統合参謀本部議長が、ケネディに中ソ陣営に対する全面核戦争の秘密計画を説明した。アメリカは、核戦力においてはるかにまさってはいるが、弱点がないわけではない。大統領がソ連が奇襲してくるとの情報を得て、こちらから先制攻撃をしかければ、ソ連はほとんど壊滅状態になるであろう。しかしその場合でも、アメリカは、200万から、1,500万人の死傷者を覚悟しなければならないし、ヨーロッパにおける死者は数千万人に上るであろう。ベシュロス、前掲書、454-455頁。ケネディにとって、10月17日の党大会におけるフルシチョフ演説は、見過ごしにできなかった。ソ連の核戦力の圧倒的な優位を、信じ込ませる危険があったからである。ケネディは、本当はどちらが優位に立っているのか、世界に知らせる決心をした。10月21日、ギルパトリック (Roswell L. Gilpatric) 国防次官が、アメリカの核優位を言明した。彼は、自国には敵に致命的な損害を与えるに足る核報復力があるので、自国に戦争をしかけるのは自殺行為であると述べた。同書、483-492頁。

27) 8月の初め、ケネディは、ロストウ (Walt W. Rostow) 大統領特別副補佐官に、つぎのように語った。東ドイツは、失血死しようとしている。東側ブロック全体が危機に瀕している。フルシチョフは、これを止めるために何かをしなければならない。たぶん壁だろう。そしてそれについて何もすることはできない。Reeves, *op. cit.*, pp. 207-208.

28) ベシュロス、前掲書、420頁。

29) シュレジンガー、前掲書、418頁。